



JICA
だより



ヨルダン①
(2021年から派遣)
すぐる
福山 傑 さん(25)
アンマン在住

「今後のヨルダンの水泳界に一石を投じてやろう」そんな強い思いを抱いて2021年、JICA海外協力隊員としてヨルダンにきたが、あつという間に任期の2年がたとうとしていく。この国の競泳ナショナルチームを指導してきたその2年を振り返ると、当初は競技力も認知度も低く水泳途上国といった印象だった。加えて練習はサボりやごまかしが目についた。日本ではかつての根性論に代わり、より効率的な指導が求められているが、ヨルダンの選手には逆に、諦めず継続する力が足りてないと感じる。大学卒業まで目標に向かって水泳に打ち込め、忍耐力が培われた私にはもってこいの国に思え、最初は水を得た魚のような感覚だった。だが、1年が過ぎた頃、

諦めず継続 伝え続ける

海外を見れば見るほど「日本人が異常なのは」と感じることもあるが、今はその「日本人らしさ」を選手に伝えようと取り組んでいる。焼け石にも水をかけ続けたいのだ。



競泳ヨルダンナショナルチームのチームメートと。左端が筆者

やりたいことが何もできていないことにがくぜんとした。異文化理解を優先させ、歩幅を合わせ、幅を合わせるのに必死で、気付けば本来の目的を見失っていた。こちらの流儀に流された。こちらのスポーツの指導は「答え」を与えるものではない。それが分かれば皆オリンピック選手だろう。世界は多文化共生が求められる時代。「魚心あれば水心」。相手を理解し尊重することを大切にしつつ、私が持ち合わせる「日本人らしさ」という別の角度から「ヒント」を与えている。

協力隊の生活も残りわずか。背水の陣で挑み、帰国時には言われているだろうか、水も滴るいいオト、か、水の話はもう十分。選手たちにそう思われてはいけませんが、ヨルダン水泳界の発展を願ってラストスパートをかけた。